

「また、三島由紀夫について、そして最近の映画から」

三島由紀夫原作の作品が映画化される機会は多く、1960年代以降その傾向が強まったようです。少し時代を遡りますが、1950年代から1960年代にかけて、獅子文六（1893~1969）のベストセラーをめぐる映画会社の「争奪戦」や「競作」は非常に激しいものでした。その理由は、三島由紀夫が「純文学と大衆性の融合」だったのに対し、獅子文六の作品は当時の映画界にとって「完璧なエンターテインメントの教科書」だったからだと言われます。例えば、氏の朝日新聞に連載された小説「自由学校」は松竹と大映二社で激しく火花を散らし、結果的に両社が同じ原作で映画を製作し、1951年5月23日に同時に劇場公開するという事態が起こります。この争奪戦は世間の大きな話題となり、結果として両社とも大ヒットを記録しました。当時のベストセラーがいかに強力な集客力を持つかがよく分かる象徴的な事件です。そして、1960年に入っても日本映画界で原作ものやベストセラーの映画化が多かったのは、TVの普及による観客動員数の急減への対抗策であったと言われます。会社側としては確実な集客とリスク回避が何よりです。シナリオライターからしてみれば、面白いオリジナル作品を書きたくても会社側が安全な原作の企画を優先せざるを得ない構造があったのです。三島由紀夫の場合、前述したように大衆性と純文学の二面性を持っていたこと、それに圧倒的なネームヴァリューがあったこと、加えて三島由紀夫自身映画に主演したり、自身の短編を製作・監督・主演するほどの映画界との密接な関係が構築されていました。そうした中で、取り上げたいのは木下亮監督『肉体の学校』（1965年）です。木下亮（1931~2016）と言えばTVドラマとして絶大な人気と質の高さが特徴だった『太陽にほえろ』と結びつくほどシリーズの中でも多くの番組の監督の実績を持つ人物です。1955年に青学から東宝助監督部に入社、同期に森谷司郎、恩地日出夫がいます。1964年に監督デヴュウ、『男嫌い』を発表します。森谷司郎より2年も早く監督昇進を果たしますが、もともとTVドラマで話題を呼んだ『男嫌い』を「映画のオリジナリティを出そうと種々の実験が試みられシャープな画面構成とともに、そのユニークさが買われた」と評されますが「しかし、それが東宝のワクの中では逆に作用した形となり」それが災いしてか、本作を発表したのを最後に監督の機会を得られず1967年に東宝を退社しフリーの道を歩むことになります。豊田四郎、成瀬巳喜男、川島雄三の助監督として師事し、森谷司郎、恩地日出夫らと同様東宝カラーを確実に受け継ぎ、本作において男女の愛欲をスマートに都会的に品の良さを感じさせるほどに描いた手腕は得難い才能と感じさせます。旧華族の夫と離婚し、潤沢な財産を贈与され何不自由なく暮らす女性の有閑マダム的奔放な性の逸脱を、幻想性を持たせた映像とともに、主演の岸田今日子と山崎努の男女の駆け引きはドラマ的盛り上がり最高潮にまで高めるものでした。二人の演技が光ります。この年のキネマ旬報のベストテン選出では、白井佳夫のみが一点を投じるという結果でしたが、プログラムピクチャの中で異彩を放つ佳作として呼べる一作です。

多くの映画を見る上で、サブスクという便利なツールがあることは大変ありがたいことです。また、思わぬ旧作に出会うことのできる機会さえ得ることができます。そんな中で、アルフレッド・ヒッチコックの『殺人!』（1930年）がありました。舞台劇「サー・ジョン」をヒッチコック夫人のアルマ・レヴィル

が脚色。ヒッチコック自身も「わたしとしては珍しく謎解きの映画を撮った。原則としてわたしはこの手の犯人探しは決して撮らないことにしている。なにしろ最後の謎解きの結末で犯人がわかるところしか興味がないからね」と言っていますが、自身気に入った作品のようです。（これはむしろ珍しいこと）ある女優が同じ劇団の女優殺しの容疑で逮捕され死刑判決を受けます。陪審員だったサー・ジョンはこのとき「有罪」の判断をしますが疑問を感じ、自ら捜査のやり直しを行います。そして死刑執行ギリギリで真犯人を見つけ出し、無罪を勝ち取るという筋です。ヒッチコックは本作で、ハムレットの中での劇中劇よろしく真犯人に大きなプレッシャーをかけて追い込むという見せ場を作りますが、真犯人の弱みとは彼がホモセクシャルな人間であり、そのことがフィアンセに知られることを恐れ殺人を犯すことになったのです。ところが、日本公開版（つまり日本語字幕付き）での本作を見るとホモセクシャルであることは伏せられているのです。それは「混血」であるというふうになっているのです。字幕でそのように出てくるのです。黒人の血が混じっているという秘密の暴露が日本公開版での犯行の理由となるのです。実に奇妙な話ですね。本作が日本で劇場公開されたのは1994年になってからで、公開から実に64年もの歳月を経ています。1994年の時点でこうしたホモセクシャルもしくはLGBTへの嫌悪とでも言いましょうか、それが原因ともなりこうした措置が取られたのでしょうか。実際に本作を見ていれば、「混血」こそ不自然な言い訳であることは分かってしまうのですが。こうした奇妙なことが起こるとは理解できませんし、作り手側の製作意図を大きく捻じ曲げてしまうリスクも孕みます。日本語字幕版は即刻改訂すべきでしょう。

もう一本は新しい作品からカーリー・バーカー『オブセッション』を。1999年生まれのカリー・バーカーの長編第1作目で低予算（750千USD）ながら全米で443百万USDの興行収入を記録した大ヒット作です。概ね評価も高くホラー映画のアメリカでの根強さを物語ります。日経映画評で北村紗衣は「人間の恋心に潜む無邪気とも言える愚かさどこかに潜む暴力性をジェンダー批判的な視点を折り込みつつ容赦なく突きつけてくる作品」と最高点を付けています。アメリカではYouTubeその他の配信で数千万回の再生を記録し、SNSを中心に若年層への浸透が行き渡ったと言います。また、本作に目をつけたのは、現代のロジャー・コマンと呼ばれるジェイソン・プラムでありフォーカス・ピクチャーズと組み全米でのワイド・リリースを可能にし興行的成功をもたらしました。あくまでもスキャンダラスなセンセーションを呼び起こすことを最大の評価と考えたのでしょうか。主人公ニッキーの姿が村上春樹の新刊「夏帆」に出てくるブラジルから放逐された女王蜂の姿にシンクロするという現象を感じたりもします。筆者には北村紗衣評にすべて同意することはできず、むしろタイ・ウエストの『パール』のミア・ゴス演じるパールの方が好みですが。ニッキーが再び続編に登場するのではないかという気もします。本作の興行的成功はアメリカ映画界の衰頹の象徴として記憶されるのです。というのも、筆者にはあまりのイージーさに作品自体の深みに欠け、ただおどろおどろしくあるだけだと感じられ、そうした訴求だけでは一過性のものに堕してしまうリスクがあるからです。しかし、ロジャー・コマンのことを考えればという気持ちにもなるのですが。（文中敬称略）